ポスターNo.A1　　実践発表

日本語指導が必要な子どもの視点に立った教科書分析による授業改善をめざした教員研修の実践

—生成 AI を活用した理解支援教材づくりを通して—

浦 久仁子（堺市立殿馬場中学校 日本語指導センター）

１．実践の場の特徴

本実践は、2026 年夏季休業中に、日本語指導が必要な児童生徒が増加している堺市立小学校３校（職員各 30～40 名程度）と大阪府立の支援学校１校（参加者 100 名程度）の校内教員研修で、授業づくりや児童生徒への対応に関する教育課題研修の一部として紹介した。また、例年開催されているという日本語指導関係者や担任等約 100 名を対象とする近隣市・県の合同研修では、約２時間の研修内にワークショップとして位置づけた。いずれの研修でも、開始時の問いかけに対し、授業準備に生成 AI を活用しているという参加者はほとんどいなかった。

２．実践の背景と目標

教科書分析の背景には、初期指導を修了しても理解語彙が極めて少なく、教科書は「語彙の海」のようで溺れそうだと語る児童生徒や漢字習得が困難で「教科書を見る気も起こらない」と呟く非漢字圏の児童生徒の姿がある。堺市の初期指導必須語彙は約 1300 語で、教科書の語彙との隔たりは大きい。また、日本生まれや就学前から日本で暮らしていても、家庭内言語が母語中心のため、教師が既知と考える日本語を十分理解していない場合がある。

そのような子どもたちの課題に対する教員研修では、その学びが日常の授業改善へ十分に生かされにくく、教材や指導案を作成しても多忙な学校現場では継続的に活用されるとは限らない。そこで、教師自身が無理なく継続できる授業準備の営みを研修の中核に据え、①日本語指導が必要な児童生徒の視点で教科書を読み直し、その分析から児童生徒のつまずきを具体的に捉えること②抽出した語彙を生成 AI で短時間に教材化する過程を体験し、自ら作れるという実感をもつこと③教材を児童生徒の理解を起点に授業でどう活用するかを協議することを目標とし、学習言語能力の形成を支える教材づくりを通して、授業改善につながる校内研修を構想した。

３．具体的な実践の内容とその過程

合同研修での題材は、新興出版社啓林館『わくわく理科 5』の「流れる水のはたらき」で、前述の２-①の教科書分析として、文章中にある児童生徒が知らないと思う語「曲がる、濁る、川幅、岩、砂…」を抽出した。ただし、単元で全員が新しく学ぶ語（浸食・運搬・堆積）は授業での指導事項として除外した。ワークショップでは、単元全 18 ページを一人２ページごと分担し「考える・比べる」等、全教科で学ぶ言葉も除外し、「川幅・曲がる」等、この単元で扱われる言葉を抽出し MS Forms で筆者に送信した。収集した語彙は、筆者が Copilot を用いて表記ゆれや語形を統一し、重複を整理したうえで品詞別に分類した。



図１　生成 AI による理解支援ポスター

次に、２-②の教材化では、素材として抽出した

語彙と「日本語学習者の外国人児童向け A3 横位置学習ポスターを作成して。前述の語彙をやさしい日本語で説明、すべてにイラストを付け、漢字にはふりがな、品詞等カテゴリーごとに色分け、中国語・ベトナム語・英語を小さく併記、見やすく配置」というプロンプトを生成 AI（研修では Copilot）のチャット欄に記入し送信した。生成は 2 分程度で、完成の瞬間、会場の参加者から大きな反響が見られた（図１）。

生成されたポスターは、すべてにわたって目視での点検が必要となる。漢字やふりがなの正確さは以前より向上しているものの、紙面の関係上か 3 か国語の併記は一部で、解説やルビ打ちが不完全なところも見られた。対訳は検証が難しく、イラスト説明もあるため省略も可能である。作成されたものを再度、修正すると、別の部分が崩れる可能性もある。生成 AI は大まかな指示でも一定水準の成果を期待できるが、指示の具体性や要求する情報量の見極めも重要である。

その後、２-③の活用協議では作成した教材の活用方法を Padlet で交流した。

４．結果と考察

参加者の感想には「教科書を児童生徒の視点で読み直す経験は初めてだった」「何がわかりづらいのかというのが明確になった」とあり、語彙支援の必要性への認識が高まり、支援の対象を具体的に捉えられるようになったことがうかがえる。また、日本語指導が必要な児童生徒だけでなく、日本人を含め言葉の理解や表現に支援を必要とする児童生徒にも役立つとして、全員への配布を挙げる声が複数あった。これらは、個別の児童生徒の困難への気づきが、すべての児童生徒の学びを支える授業づくりの検討へと広がったことを示している。

本実践の特徴は、生成 AI による教材開発そのものではなく、第一に、教師が日本語指導を必要とする児童生徒の視点から教科書を読み直し、そこで捉えたつまずきを生成 AI への指示に反映したこと。第二に、単元で全員が学ぶ教科の専門用語と、既知とみなされ見過ごされやすい語を区別して抽出し、教科の目標に沿った指導と、その学習を支える日本語支援との関係を捉え直す契機としたこと。第三に、作成した教材を授業のどの場面で、どのような形で活用するかを参加者間で検討し、具体的な支援の方法を共有知としたことである。

こうした過程を通して作成する理解支援教材は、来日間もない児童生徒に加え、家庭と学校で使用する言語に隔たりがある児童生徒や、日本語母語話者であっても語彙に触れる経験が少なく学習言語の獲得も十分でない教科書理解に困難を抱える児童生徒など、多様な学習者の学びを支える可能性をもつ。教材は、教科内容の理解や定着を図る授業そのものに代わるものではないが、語彙へのアクセスを支える足場として授業設計を補うことができる。特定の児童生徒への支援を出発点として、すべての児童生徒が学習内容にアクセスしやすい授業を構想することは、教育のユニバーサルデザイン化に資する教員研修の一つの可能性を示していると考える。

ただし、研修後の授業での活用状況や児童生徒の理解への効果は、現時点では確認できていない。参加者が連日教材を作成しているとの知らせもあったが、伝聞による一例であり、継続的な実践への広がりを示すには、今後の検証が必要である。一方、短時間で教材化できる手軽さは、多忙な学校現場で教師が支援を繰り返し試みるための条件となり得る。今後は、教材の作成・点検・活用・改善の過程を追うとともに、児童生徒自身が必要な語を選び、生成 AI を活用して理解支援教材を作成することなど、自律的な学びへの発展も検討したい。本実践が、教師の授業改善と児童生徒の主体的な学びの双方を支える実践モデルの一つとなることを期待している。

【引用文献】（令和 5 年度用）『わくわく理科　５』新興出版社啓林館 pp.96～113